'70 駿台祭広報

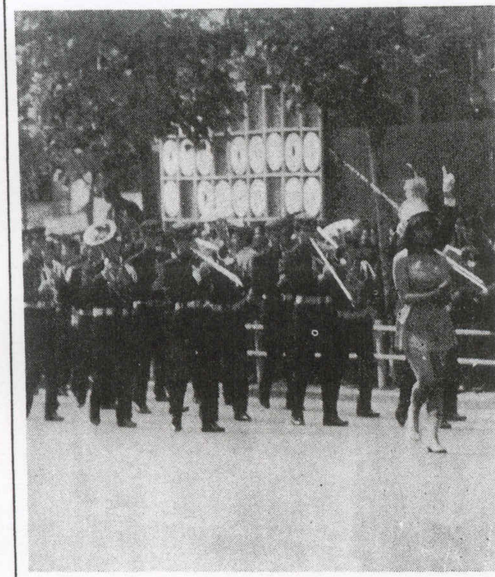
発行所
明治大学駿台祭実行委員会情宣部
東京都千代田区神田駿河台1の1
TEL (291) 9896
発行人 増田 昭
編集人 藤原 温司

89回 駿台祭テーマ

逃げも隠れもいたしません わたしはここで生きてます

後日談

未だ見ぬ夢に関するメモ帖



僕達が本当に願っていたのは、こんなに過剰な空間であったろうか。実は、願っていたのは全世界ではなかったのか。こんなに手狭まな四畳半ではなかった筈なのに。そして、僕が望んでいたものは決して「平和な家庭」ではなく「革命」であった筈なのにこの仕末は一体どうしたことなのだ。

それにもまして、この女房のひどさときたら、どういうことなのだ。僕が色目を使ったわけでもないのに、勝手に押しかけて来て、〈あたし、あなたの傍で暮らすことにしました〉その一言で住みついて、もう五年にもなろうとしているではないか。僕の好みはも少し容姿端麗で教養ある処女であったのに。ついに捕われてしまったではないか。そして、そのまま、第二戦線からズルズルっと脱け落ちてこの仕末。

言葉としての〈生活〉が実体として重くなってはもう「革命家」も「芸術家」もお終末ではないか。〈わが青春のクロニクル〉はどこにも残っていないのか。

朝目が覚めて窓を開けて「ヒルにチカイアサー」とか「フーケイ」とか呼んでいた頃はまだ良かったのだ。そこには、気怠るくても〈青春〉があったのだし〈時間〉がまだ充分に残っているような気がしたもんだ。だから、公害の、スモッグのといっても、東京は大原交叉点の近くに生息していることができたのだ。そして「逃げも、隠れもいたしません《わたし》はここで生きてます」などと粋がってもいることもできたのだ。

そうだ、あれは錯覚だったのだ。僕には、まだどれだけか土俵が残されているなんてどうして、馬鹿な思い違いをしたものだろう。「腐っても〈左翼〉」だなんていうのは引かれものの小唄にすぎないではないか。「腐ってしまえばオッペケペ」

ぼくは二十歳だった。それがひとの一生でいちばん美しい年齢だなどとだれにも言わせまい。

一歩足を踏みはずせば、いっさいが若者をだめにしてしまうのだ。恋愛も思想も家族を失なうことも、大人たちの仲間に入ることも。世の中でおのれがどんな役割を果しているのか知るのはつらいことだ。

ーポール ニザン
「アデン・アラビア」より

へっ。なにを言ってやがる。たしかに、ニザンさん、おめえは偉れえよ。世にひきいるエセ革命家と比べればたいしたもんだぜ。でも何も解っちゃいねえのさ。この「革命」の夢を失なってしまった老い易い青年のことなぞ。むろん、他人に理解してもらおうなんてこれっぽっちも思っていない。というのはエエカッコ過ぎるかしら。

いつまでも、〈青年〉でいられるとは甘い夢。ましてや、いつまでも〈少年〉の日の追憶に耽っていられるなんては思っちやしねえ。でも、〈大人〉なんかになりゃしねえ。絶対になるもんか。これが僕の〈思想性〉だぜ。

押すなよ。押すなったら、もう土俵は残っちゃいねえんだから。そんな「生活」なんて言葉で初な僕を押すなったら。こちとら、打遣りができる器用にはできていないんだから。オドリャー。手前の論で他人の生き方を切りすてようっていうのかい。それなら、こっちにも覚悟はあるぜ。抜いちゃならねえこのドスを抜けば血の花咲かせましょ。

いいか。女を口説く方法はあっても、女に惚れる方法はないんだぜ。つまり、女を口説く方法ばっかり考えて、上手になっている奴は女に惚れることを忘れてしまうぜ。よく聞け「武運徒」。

ものごとは矮小かすればする程リアリティがある。すなわち。革命を成就する方法はあっても、革命になる方法はない。

「革命は欲しいけど、革命はしたくないのだって、苦しいでしょ、世界は二人の為にあるの?」良く言ってくれたぜお前。これで僕も、お前も、日和見で反革命分子だぜ。正真正銘の粛正されるべき反革命だぜ。むろん、開き直りなぞもう必要なし、「逃げも隠れもいたしません《わたし》はここで生きてます」なんて口が裂けても言わないでいいのさ。

で、一体、何処へ逃げようか。北の果の函館へでも「ハールバル」いってみようか。それとも「雨の」長崎にでもしようか。いやいや、どうして、こお僕達は国内しか逃避所を思いつけないの。これを島国根性っていうんだろうね。きっと。故に、日本革命は世界革命を展望せず。

「生きるって、生きるって耐えることなのね」冗談じゃないよ。そんなのはあの太平洋戦役中のスローガンだろう。耐えなきゃならない〈生〉ならば、よほど〈死〉を撰らんだ方がましなのではないかい。いや、生きるのも辛いけど〈死〉ぬのはもっと辛い。だから、だから、耐えずに生きましよう。

さあさあ、お立ち会い、反革命の夢を喰う〈バカ〉として耐えずに生きる分析表だよ。

その一、女に惚れてその女をモノにするのも、世界に惚れて全世界を獲得することも等価であると思え。〈革命〉が歴史の必然である時代は終ったのだ。このテーゼを信じられない奴。理解できない馬鹿。そんな輩が間違って〈革命〉に勝利しても、それはスターリニスト政権でしかないのだ。

その二、死に急ぐでもなく、生き急ぐでもなく、耐えずに生き続けよ。もし、「感性の無限の解放」を目指すなら、他者によっても、自己によっても、自分の〈生〉の機制を甘受してはならない。「感性」とは普遍的に存在し得るのではなく、〈生〉きた個体にのみ宿るのである。

その三、生身の肉体で空を飛ぶことを覚えよ。その身の軽さに、ポオンと地を跳ると、すっとこの肉体が舞い上り、天空の中を縦横に飛び上る方法を憶えよ。たぶん、僕達はガキの頃、ブランコに乗って、あの大空の果に飛んでゆくことができたのではないか。でもこの二十数年間の中に、もうこんなにも重くなって、片足を動かすにも、瞼をちよっと上げるにも「ヨイショ!」である。疲かれ切ってしまったのではない。「疲かれ」を知ってしまったにすぎないのだ。空を飛んでいて疲れて、体が重くなったら、まあ平泳ぎでもやってくれ。手足バタバタ、スイスイ。それでも駄目なら墜落して、豆腐の角に頭をブッけて死んじまえ。

へイ、おそまつさま。

実行委員追加メンバー
沢野 章 工四
籔地 政導 政二

石楠花（しゃくなげ）

毎年、九月ともなると明大通りには何か浮き浮きしたムードが漂ってくるものである。しかし、今年は何故か小生だけが乗ってしまってまわりが拒絶反応を起こしそうな気がしてならない。

まず、実行委員会室に入るまでに目につくものと言えば鉄棚と堅く鎖された正門。そして地下のずっと片隅に小さくなっているのが実行委員会室なのである。午後七時ともなれば守衛さんに深々と頭を下げながら逃げるようにして構内を立ち去る。何故か俺達の学校はないかなあ…等と呟きながら。

例年通り今年も、広告取りという資金集めから小生達の活動は開始された。しかし一昨年までは「アァ明大の学生さん。良いですよ」と言った調子が、今年は「学生に金を出しても一文の得にもなりはしない」と変わり、失われた人間関係は二度と取り返しのつかないことを痛感させられた。

しかし、まわりが拒絶反応を起こしかけているからといって小生達の信念を曲げるわけにはゆかない。この伝統ある駿台祭を止めることは断固として出来ない。

我々の生き残る道は唯一つしかない。それは、このような時にこそ、近代薄れつつある実行委員二十余名と三万の明大生との結びつきを深めて、大成功のうちに駿台祭を行ない拒絶反応を解消することである。小生達は今年の駿台祭に恐らく過去はなかったであろう、駿台祭ルネッサンス的要素を取り入れようとしている。昨年の中止という事態を契機として新しい学祭の出発の絶好の機会でもある。小生達は絶対にやる。学生諸君も積極的に参加して欲しい。積極的に。

日本万国博も成功擾に終了したと言われる。だが、その良し悪しの評価は別として駿台祭は絶対にあのようなものにしてはならない。自分達の主張を主張としてはっきり打ち出せないのならば、それはフェステバルという言葉を如何にこじつけて解釈しようにも仕様がないのである。

だから我々は限られた範囲その中で最大限羽根を広げて見ようではないか。

S・I生

日程決定

前夜祭 10月30日
10月30日～11月3日まで

多数の御来場をお待ちしております。

11月3日 PM5：00～9：00
於 記念館・91番教室

駿台祭 プログラム

貴方の良きアシスタント

カラフルな表紙、グンバツな内容。

近日発行

駿台祭実行委員会編集局

駿台祭を開催するにあたって

第89駿台祭実行委員長

増田　昭

駿台祭も今年で数を重ね八九回を迎える。その間真新しい記憶として残る昨年の中止という事態を含め駿台祭の歴史は真に大学と共に歩んだ学生の歴史であった。戦前、戦後そして六〇年前後と時代は変り、その表出された〈もの〉もある時は抵抗の時として、又ある時は充足のフェスティバルとして語られたが、それらはすべて先駆者の喜びの表現であり、挫折の焦燥感、怒りの表現であったことに変りはない。

時は七〇年。大学は相変らずベニヤ板をはった半ロックアウトの状態であり、昨年六月以降の明大斗争も何んら具体的なメドがたたないままにうやむやのままに過去に置きさられようとしている。そして又客観的に見て学生大会さえ開くことのできない中執の崩壊。最後に私達と現在の大学を象徴している高い檻のような鉄格子。今私はこうした現在の情況を語ろうとする時一方的に他者を責めようとは思わない。むしろこうした情況を作ったのは私であり私たちであり私達の中の他人であるから・・

そして、又こうした中で私達実行委員会は何を語ることができるであろうか。否さらに今さら大学祭の必要があるのだろうか？という問いが向けられても当然であろう。そうした問い掛けに対し私は単に昨年やらなかったから、ない！時期が来たからという無内容な答だけで語ろうとは思わない。あえて気負うなら駿台祭が現在の情況の中で必要だから行うのである。駿台祭が失われてしまった学生の連帯をイメージとして提起させる唯一の手段だから行うのである。

そして、それが単なる五日間の幻想に終るかどうかは私達すべての問題なのである。でも私達実行委員会は、やはり何かを語ろうとする時、単なる司会者にすぎないのである。常に「あなたならどうする」という形で問いかける集団にすぎないのである。しかし私達も司会者なりに過去を総括し、現在を語ることも又そうした作業を徹底的に煮詰める中から情況に肉迫し、その核に触れることもできるかも知れない。そうした中からテーマが生まれ、基本方針が作られる。

その時、貴方ならどうする・・・

公示

実行委員会

昨年来、続いた紛争そしてロックアウトと数多くの問題をかかえた現在という情況の中で私達は何を語り又何を為そうとしているのか。

手渡されるアジビラも、がなりたてるアジテーションも空々しく通りすぎて行く私達。こうした私達の無力感、虚無感が私達のキャンパスを包括的に表わしているのではないだろうか。私達が現在までの情況の中から何を自分自身の《もの》としただろうか。すでに万物を知り尽した様なニヒリズムか。あるいは単なる就職へのパスポートとする巧利的な自覚なのだろうか。もしもキャンパス内の混迷がそして私達の叫びを封じたものがこうした《もの》であるなら、私達はこうした《もの》を共有することを拒否しなければならない。例え私達の混迷がそしてキャンパスが現実に押し流されたものであったとしても。何が私達の叫びを封じ、何が私達の存在を押し流したか。そして私達の内部の何がそれを容認したのか。私達は明らかにしていかなければならない。

私達は多大なる混迷をもたらして来た、日常の中から乗りこえるため。再度その真の総体を個人、各サークル、各組織とすべての問題において明らかにそれを表出するため駿台祭《大学祭》の構築をしてゆかなければならないと考える。

駿台祭ねえ!?

H・O生

もうなあーんにも言わないなんて言うな、言うな。たとえばこう言う。「始めから始めなければならない」。またこうも言う「僕にはすることが何もない」。それでアタクシー妻ハ美シイ、とか子供達ハ元気ダとか、も言う。そりゃまあ、まったくその通りなんだ、まったく、そりゃもう………

むろんいつものことさ。相変らずいい天気だ。ああ僕の胸のあたりもいい天気。

一日暮すってえのは長いねえ、この時間。うまくやるしかないねえ。うまくやってこいつ、この時間てえのつぶすしかないんだ。でしょ。それで、僕はやってるんですね、これを、駿台祭とかいうクソッタレェー。べつに笑ってもいいんだ。結果?そりゃもう上々、僕の外で時間はつぶれて行くよ。ああ、だいぶ向うの方でつぶれて、風に吹かれて舞うマロニエ通りの枯葉てな感じで、道ばたに落ちてるよ。僕の中に何かあるみたいで、去年の時間かなあなんて思ってみてもやる気しないし、それでも少々困ったりして、その辺をさぐってみて、つかめなくて、つかめないって風態でさ………馬鹿だよなあホント。

最近いろんな人にあうねえ。おもしれえことねえ?ちったあ、何んて言ってるよ。白い顔してさ。夏だなあ関係ないけど。僕ねえ、実は考えてるんだ。いろいろあるけど一番、でっかい奴は、世直しあっ笑てらあ、バーカメ。考えてるんだから。考えるばっかしだよお――――。駿台祭ってどうだっていいやねえ。時間つぶれていいけど。それだけだ。僕は20才なんだよ。夏だしいいイメージ湧くと思うかなあ。なんたって駿台祭やってるんだもんなあ。

ともに駿台祭を歩もう

編集局

駿台祭、スンダイサイ、すんだいさい。と読んでも、そこにあるのは、やはり駿台祭。もう一度、スンダイサイ、すんだいさい。と読んでも、そこにあるのは、やはり駿台祭。決して、スンダイサイ（死だ祭）とはならなかった。駿台祭とは、何にか、と問う前に大学祭とは何にかという問いが生じる。その解答は、明らかである。駿台祭に参加することです。オリンピックにも、参加する事に意義がある。といわれているように、駿台祭にも言える。と私奴は、思います。今まさに始まりつつある駿台祭（あと四ケ月しかないですぞ。）四ケ月非常に遠く感じている人もいるが、私にとって非常に短い。何故なら、在学中（四年で卒業できればの話しですが）十二分の一しかないじゃないですか。その短い期間を、あなたはどうしますか。海へ、山へ、レジャーだと騒ぐのですか。明大生のあなたが、そしている間に、もう一つの明大生は、斗っているのです。己に対し、自己に対し、そして社会に対して。

一日なんていうのは、陽が昇り、陽が沈み、そして夜になり、月が出て、星が輝き、そして消え、又陽が昇る。のくり返しじゃないですか。そして人間の生活も、朝になったら、起き、仕事場に行き、そして夜になったら、一人でか二人か、はたまた数人、数十人でねるか分かりませんが、そのくりかえしではないでしょか。さあ、くよくよせず、行きましょう。一諸に、私達と、もしあなたが、女性なら、私だけと。さあ、行きましょう。一諸に。駿台祭に向って行きましょう。逃げずに。おそれずに、私がついています。あなたの、私です。さあ、行きましょう。駿台祭に、向って。

公　　募

第89回駿台祭実行委員を下記の要領で募集します。

一、資　格　　明治大学々生であること。(短大を含む)
一、〆切り　　7月末日迄
一、連絡先　　生田地区理科部連合会本部
044(91)8181 内485
本校及び和泉地区
体育会本部 (293)9632
応援団本部 (293)9638

なお準備中，実行委員会に専念できることを条件とします。

第89回駿台祭実行委員会

公　　募

第89回駿台祭に参加し，展示，研究発表，その他の企画を希望する団体を下記の要領で募集します。

一、参加資格
明治大学におけるサークル，団体，クラス，ゼミ，その他有志。
一、期　　間　　7月末日迄
一、連 絡 先　　生田地区理科部連合会本部
044(91)8181 内線485
本校　体育会本部 (293)9632
応援団本部 (293)9638
和泉地区　学館運営委員会

第89回駿台祭実行委員会

実行委員会の声

私たちは、ここで組織者としていう事は、何も持ち合わせていない。すべてとっぱられてしまったところにある〈私〉のあり方なのであり、そこに実行委員会とのかかわり方が見出されるものでもある。